

# 小田原史談

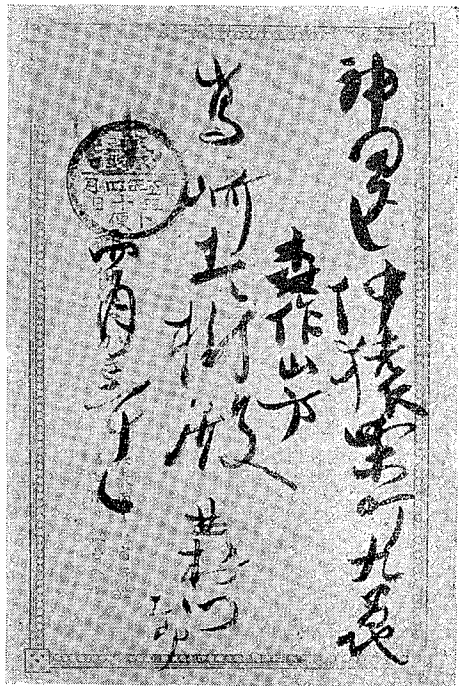
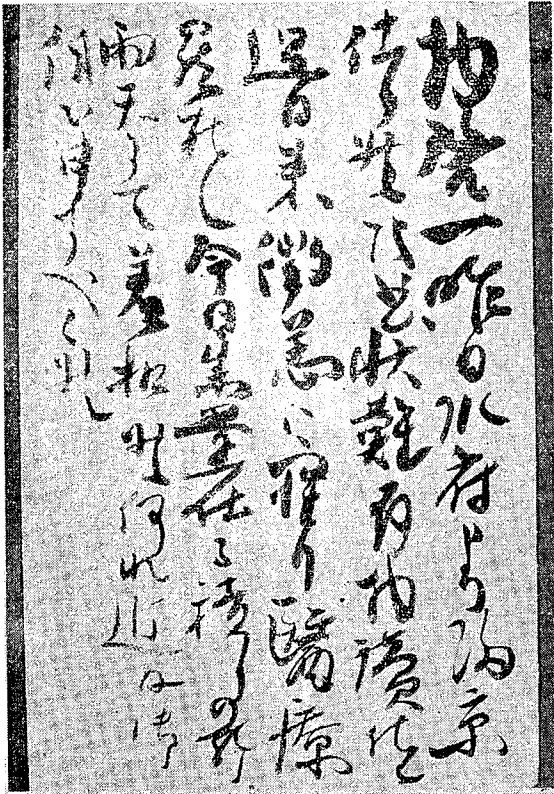
第34号

発行所 小田原史談会  
小田原市幸一丁目  
郷土文化館内

## 北村透谷の筆蹟

島崎藤村宛はがき

このはがきは明治二十五年四月透谷が世を去る二年前二十五才のとき書いたもので、当時京橋区弥左衛門町（現在銀座西四丁目）の母の実家に居住していた。透谷は小田原を出でて永らくこの母の実家に居てここで正規の学校を卒業した愛着の地で、ペンネームも近くの数寄屋橋の名に因んで数寄を透に屋を谷に合せてたものであった。このペンネームは小田原を第一の故郷に、現在の銀座を第二の故郷としたことが同われる（この記念のはがきについては次に掲記した我が小田原出身の詩人井上康文先生の書簡を参照せられたい。M）



## 井上康文先生書簡

冠省 御暑の酷し 谷のはがき写真にとってお  
い折柄御健勝何よ きましたので、記念に御送  
りと存じ上げます りします。

。御心にかけて「 暑い折柄どうぞ御身御大切  
小田原史談」御送 に、そのうち御訪ねいたし  
り下さいましてあ ます。いまはちょっと忙し  
りがとう存じます い仕事をしていますので。

先月（二十九日） 先日小田原の娘の墓参りに  
NHKのFM放送 まいりました。「民衆碑」  
「朝の訪問」で小 も見ずに帰りました。一日  
田原のことなどい ゆっくり歩く気分になれな  
ろいろ話しました いのです。たぶん来週あた  
。録音のテープを りは行けるのではないかと  
とりましたが、思 思いますが。

いがけなくよく放 透谷のはがきは、小田原  
送されました。い に透谷碑が出来るとき、私  
つか申し上げた透 と福田君が、いろいろ島崎

藤村氏の御相談のつて奔  
走し、主に福田正夫君がや  
ったので、東京で私が少し  
動いただけでしたが、島崎  
さんからお礼に二人でハガ  
キを一枚つつ貰ったのです  
。福田君の方は戦災で焼い  
てしまったようですが、私  
は大事に持っています。

勝本清一郎編「透谷全集  
」第三巻（岩波版）二二  
五頁に島崎藤村宛葉書一  
八九二年四月三十日  
拜啓、一昨日水府より帰  
京仕り候、御書状有難拜  
読仕候、過日来徹恙に罹  
り医療罷在候、今日 参堂

仕る積りの所雨天にて差  
扣候、何れ近日御伺い申  
すべく候

【表書】 神田区仲猿桑  
町九番地森作山方島崎  
春樹殿北村門太郎。

四月三十日(消印)武  
蔵東京芝口二十五五年四  
月三十日卜使。

と出ており、五五二頁に  
島崎藤村宛葉書、一八  
九二年四月三十日、墨  
書。井上康文蔵

と記載されておりませう。  
その次の行に

島崎藤村宛葉書、一八  
九二年五月八日、墨書

。福田正夫旧蔵。第二  
次世界戦争の戦災によ

り原本焼失。表裏二枚  
のキャビネ版写真を勝

本清一郎蔵

とあります。その福田君の  
貰った葉書は「拜啓過日  
御約仕り候は午後に築地  
に参る事に候いしが、止  
むを得ざる事故出来し  
午後四時頃まで他出致し  
候に付き、甚だ勝手なが  
ら午後四時半に拙宅に御  
来駕被下度、毎度我儘を  
申し出候段、御容赦被下  
度候。御返事なくば右に  
て御不都合なしと心得申  
すべく候、用事のみ。」

北村門太郎 七月三十一日朝

井上康文

斐田長平様玉案下

というものであったと記録  
されています。とにかく、  
私にとっても貴重なもので  
すし、透谷のものともうい  
くとも残ってはいないので  
、写真にとっておいたわけ  
です。御費下様の御仕事の  
御役に立てばお使い下さい  
。では何れませう。

(透谷全集第三卷六一三  
頁に記載)

### 千代の寺と雑話

(本稿は内田武雄氏の旧稿で私に送られたもの  
である。参考資料としてきわめて興味深いもの  
があるので全文を掲記す。斐田)

わが庵は松原つづき  
海近く

富士の高嶺を

のそばにぞ見る

こう道灌が詠じたのは、  
小田原の千代からの眺めで  
そこに、かつて城があり、  
江戸千代田城は、その千代  
の地名からだ……と説く人  
がある。火の氣のない処に  
煙りは立たない。たしかに  
土地の人も千代に太田道灌  
の城があったものと信じて  
いる。今千代に華公山太田  
道灌院円宗寺と言うお寺が  
ある。詳しく言うとお小田原  
市千代四九で、お寺の三十  
代目住職大場得玄師は中学

黒像は珍らしいものである  
実はこれが頼朝の息女乙姫  
の乳母の座像である。

大きな板一面に書かれた  
牽造立一間四面兩堂一宇、  
大檀越從二位前右近衛大将  
権大納言源明臣頼朝御芳縁  
御所生、平朝臣時政、比丘  
尼妙法、藤原親能とあるの  
は、池鏡院長立庵一名乳母  
へのもので、頼朝の息女乙  
姫が正治元年六月晦日に、  
惜しくも十四才で死亡した  
時乳母比企の局は責任を感  
じ妙法尼となり、千代に來  
りて長立庵に引きこもり、  
その夫藤原の親能は出家し  
て寂忍と号した。頼朝愛妾  
丹後局は実は、大友氏の女  
で、乙姫の乳母であったこ  
の比企の子である。この丹  
後局が政子の為に一命危う  
いところを畠山重忠の機智  
で一旦厚木の奥小野の里に  
かくれ、更に遠く九州鹿尾  
島落ちの際身重の旅路で相  
模国を去る時、この千代  
の長立庵で母の妙法尼と涙  
の別れをしたに違いない。

酒臼川の下手に道をとって  
暗い闇路を進んだ時、稻荷  
(とうか)の森のあたりで  
沢山の狐火が現われて道を  
明るく照らし白狐が途中ま  
で守護したという。丹後の

局が九州に落ちたのは、当  
時大友氏が検比使左衛門尉  
豊後守であるから九州に居  
たはづである。これをたよ  
って行ったのであろうと思  
われる。そこで此地に落  
ち着き丹後の局の子が島津  
家の祖と成ったのである。  
大友能直は元久中鎮西守  
護で九州に移って相模の大  
友氏は筑後の国に入り、大  
友立花の祖先となり、大友  
氏は代々鎮西奉行であった  
建武中氏泰は足利尊氏の嗣  
子となり、源姓を継ぐ。戦  
国の時、義隆、義鎮の勇將  
を出した。義統の時には秀  
吉に随い、文祿元年参議とな

### 芥五題

その一

時情豊かに讀えられた隅  
田川も今は見る影もなくド  
ロドロの真黒なオンボロに  
なり果て見にくい姿で東京  
を流れて行く。

東京五輪に備えて道路や  
建物は予定通り完成するら  
しいが、この隅田川はどう  
にもならないらしい。  
揚子江、黄河はたとえ黄  
土化されているところがあ

柴田善庵

るにせよ人為的な汚れはな  
い。自然が溶けこんだ濁水  
は流域への慈しみがある。  
氾濫した地区にその流れた  
泥水が肥えた黄土を運んで  
くれる。水浸しになったあ  
とは必ず豊作が続く。大  
陸らしい現象である。新中  
国大陸が治水に取組んでこ  
れを完成させたと報じてい  
るが、その後不作続きも報  
ぜられた。老子は水 の加く

強くなれと言った。水程強  
いものがなぜあのように真  
黒に汚染されたのであろう  
か。汚されながらも悠々と  
流れている隅田川は文明え  
の強い批判であらうか。

その二

隅田川が濁り澄んでいた  
頃、白魚がスイスイ泳いで  
いるのを見た。舟遊びの  
通人達はこれをすくい捕っ  
て、満々とした醤油の鉢に  
放ち、魚がブカブカやって  
いると白魚の腹が薄すらと  
紅をさした頃合いを見計っ  
て口にチュッと吸い込み、  
前歯で二つに噛むと醤油が  
にじみ出て味をつける。こ  
れで一杯やる酒の旨さは又  
格別である、ある老人か  
ら聞いたことがある。

こんな粋な舟遊びがやれ  
る隅田川だったし、食通の  
醍醐味がうなづける隅田川  
だった。

その隅田川が工場の汚水  
でこうなっなのは経済成長  
がもたらしたのか、いや  
考えてみると池田さん以前  
からこの汚れのきざしがあ  
った。それを池田さんが助  
長させたのだらうか。銀座  
や築地の川面が黒くなり、  
くさくなりかけると、いつ  
の間やらそれを埋立てて

しまった。くさいものにふ  
たをしろとはよく言ったも  
のである。

その三

沖の暗い日、湘南平に立  
って相模灘を眺めると揚子  
江そっくりの景観である。

李白の詩に

秋浦長似秋

秋浦長に秋に似たり

蕭条使人愁

蕭条 人をして愁えし  
む

客愁不可度

客愁 すくう可からず

行上東大姥

行つて東の大姥に上る

正西望長安

正面に 長安を望む

下見江水流

下に揚子江の流れを見  
る

寄言向江水

言を寄せて江水に向う

汝意憶僕不

汝の意 俺を憶うや否  
や

遙伝一抔涙

遙かに一抔の涙を伝え  
て

為我達揚州

我が為 揚州に達せよ

先日東京に移りたいとい

う家内にあんな田舎に行け  
るかたしたしなめてやったら

なにが田舎ですかとやり返  
してきた。汚濁の度合から  
すれば小田原の方がまだ都  
会らしいと言ひ聞かせてや  
った。あのドロドロに汚れ  
た楊州ならぬ東京に一抔の  
涙を送りたい。

その四

箱根から小田原に下つて

くるゴミといえはその運搬

の一部は早川が受け持っ

ている。観光客が箱根の住人

か旅館か、その犯人は判ら

ないにしても、フンドシの

川流れとはよく言ったもの

でアッチコッチに引つ掛っ

ついに小田原を経て相模

灘に流入する。このゴミが

外国に漂着する公算もある

わけ。

宮崎の青島は熱帯植物で

有名な観光地、南方からの

潮流に乗って青島に運ばれ

たゴミの中の植物で繁茂を

みたまもの、そのゴミの潮流

をたよりに南方人種が日本

に漂着して吾等の御先祖様

になってくれたとも言われ

ている。

日本の東海岸一帯の河川

から日本のゴミが潮流のイ

タヅラでどこか一ヶ所に集

まるとも限らない。

そうなれば国際的ゴミ犯

人としてアメリカの抗議に  
頭を下げねばならない。  
ゴミを政治する、これ位  
はできるだらう。

その五

国鉄の列車内の中ヅリ広  
告の余白に「ゴミを座席の  
下へ」という標語らしきも  
のでゴミの処理を教えてい  
る。

ゴミの根本処理を教えない

いでいい加減なゴマカン精

神を涵養しているのがこの

標語である、車内の一部に

ゴミ箱を備えつけてそこを

捨てに行く、満員で身動き

ができないなら風呂敷か新

聞紙に包んでいつかその備

付の箱に入れるとか、駅に

降りてから処理するとか、

こんな風に教育して貰いた

いものだ。

国の機関である国鉄がゴ

ミ座席下ゴマカンを教える

とはもっての外である。聞

くところによると国鉄の各

管区に車内清掃会社という

のがあって請負いで車内清

掃にあたっているようだ。

勿論空ビンなどが大きな収

入源になるようだ。国鉄退

職々員のために作られた会

社だらうが、まさかそのた

めに座席の下に隠せという

標語になつたわけでもある

まいなんとしてもこの教育  
はやめよう。

蠅

蠅は老人の頭にとまって、  
しばらく息をついていると  
手で払いのけられた。下へ  
降りて菓子皿のふちへ立つ  
とまた払われた。逃げて宙  
を飛びまわるより外はない  
休む間もない蠅は嘆息した  
「不安定な生涯だ。いそが  
しい生涯だ」(生方敏郎)

行く水の流れは絶えずし  
て、しかももの水にあ  
らず。よどみに浮かぶう  
たがたは、かつむすびて  
久しくとどまる事なし。  
世の中にある人と住家と  
またかくの如し  
鴨 長明

文苑

立秋大山紀行

(十五首の中)

杉山 康輔

秋立ては峽の林泉引く算水

木原の風も 冷たかりけり

ささやかな石の碑のたつ

街道の 流れに塵と汗を拭へり

ダムのをせき遠くつらなり

V型の 幽谷すでに人工に明るし

行きつりの若きも吾に

会釈する 密林を出でて萱戸の

野に立てば 小き光幻図

なり宮かこむ森 薄ばら木原を縫いて

下る坂 石仏の隣に一とき眠る

懇親の間柄なりし小川量祐

氏の薨儀に列して 葦田 長平

かくまでに悲しきものか

亡き君を 送る涙のとどめもあえず

万町去りてのちは 君なりき

その君さへも いまは世になし

悲しみもひとごとならず

われもまた 死の用意せねばならぬに

編集後記

▼曆では立秋だが暑さはなお続くであろう。海に山に出かける人がなんと多いことか。電車やバスにはこれらの人が一ぱい。熱い思いをして目的地についても旅館で満員のためお断わりを喰う始末。一日も閑静に積日の鬱を散らすなど到底できそうもない世の中になった。それよりも、たとえいぶせくも我家に誰憚らず真裸になって冷えたビール一杯に気焰を吐いている方がよっぽど好い。「味噌嘗めて呑む焼酎に毒はなし煤けかかあに酌をさせつつ」私の銷夏法はこれである。

▼いよいよオリンピックが近づいた。多くの外人客が見えるだろう。が国民全体の心構えはどうであろう。設備万端が整っても、国民道徳が低下し、あらゆる犯罪が横行しているが、外人にこれらの被害がなければよいがと私はそのみを心配している。一事が万事で犯人の一つの行動が国家、国民の信望を失なうことになれば大事である。政府は勿論これらの取締りに嚴重であろうが、われわれ国

民も直接間接に声援を送って手配に落度のないようにあらしめたものである。

▼市の名物男小川量祐君が心臓衰弱で八月五日死んだ君は史談会員ではなかったが、間接的には尽力している。私を郷土出身の詩人井上康文氏に紹介してくれたのも君である。故鈴木蒼海翁の乾分を以て任じ、ドラ声を出しワンマン振りを発揮していたが一面また温厚で親切でよく人の世話もした。私とは極めて懇親であったが、その死は誠に悼しい。多年住馴れた旅館を処分して栢山に家屋を新築して広い庭に池を廻り鯉や金魚を浮べて、品子夫人と円満な家庭生活を楽しんでいたのに……

▼残暑が酷しいといっても朝夕は追々冷気を覚えて来た。かぜなど引かぬよう各位のご自愛を祈ります。

(斐田)

歴史は人間を賢明にさせ、詩は気の利いた人間をつくる。数学は人間を高尚にさせ、自然哲学は人間を深くさせる。

ペーコン

<p>趣味の陶器</p> <p>江島屋</p> <p>小田原箱根口 電話 6602</p>	<p>そば庵</p> <p>きそ</p> <p>小田原駅前 電話二八六二番</p>
---	---

<p>御料理 仕出し 御弁当</p> <p>株式会社 東華軒</p> <p>代表取締役 飯沼相三郎</p> <p>小田原駅前 TEL (0465) 5061~2</p>	<p>楽しい生活</p> <p>明るい読書</p> <p>八小堂</p> <p>小田原駅前 TEL 5388~9</p>	<p>齋志澤</p> <p>TEL 3131</p>
--	--	----------------------------

<p>セトモノの御用は (陶磁器・陶管・植木鉢)</p> <p>株式会社 大川商店</p> <p>TEL 8513・3055</p>	<p>建築金物 家庭金物</p> <p>株式会社 星崎仲吉商店</p> <p>小田原市多古412番地 電話 2718</p>	<p>電気工事一式・設計・請負 販売修理</p> <p>兵藤電気商会</p> <p>小田原市下曾我駅前 電話国府津(7) 3578番</p>
--	--	--

<p>小田原駅前 職業安定所前向い</p> <p>喜仙寿し</p> <p>江戸風味天婦ら</p> <p>TEL 3747</p>	<p>小田原信用金庫</p> <p>小田原市幸1の179 (電話(0465)293121)</p> <p>理事長 鈴木十郎</p>	<p>有限会社 あめあるよ</p> <p>代表取締役 川口 浩</p> <p>小田原市 曾我谷津 6.16番地 電話 (0465) (7) 3808番</p>
--	---	---